

令和6年度病害虫発生予報第7号

令和6年10月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

9月26日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間9月28日～10月27日）の天気は次のとおりです。

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。期間の前半は、かなり高くなる見込みです。低気圧や秋雨前線、湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

I 特に注意が必要な病害虫

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
野菜全般	ハスモンヨトウ	—	やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナス（甲府市、笛吹市）の定点調査ほ場におけるフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。 ○甲府盆地では、サトイモおよび大豆の白変葉やブドウの葉の食害がみられる。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。 □防除所情報第6号「ハスモンヨトウの防除について」参照 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/69805589938.html ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること
抑制トマト	黄化葉巻病	—	やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）におけるコナジラミ類の誘殺数はやや多い。 □発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。
	コナジラミ類	—	やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）における誘殺数はやや多い。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットを展張する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。 □黄色粘着板を設置して発生状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。 □ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて虫を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。

※ハスモンヨトウのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【果樹全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
カメムシ類	—	やや多い	<p>○9月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）へのチャバネアオカメムシの誘殺数はやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□山間部から果樹園へ飛来するので、夕方から夜間及び早朝に園を見回り発生状況を確認する。</p> <p>□飛来量は地域やほ場によって差があるので、発生状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。</p> <p>□令和6年度病害虫発生予察注意報第2号「果樹カメムシ類」を参考に防除対策を行う。</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/107/tyuuihou2kamemushi.pdf</p> <p>※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p>

※カメムシのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/kajyukame.html>

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	疫病	—	平年並	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□窒素肥料の多用は発生を助長するため、適正な肥培管理に努める。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発すると防除が困難になるため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」(https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf)を参考に防除する。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発すると防除が困難になるため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>
抑制キュウリ	べと病	—	平年並	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	うどんこ病	—	平年並	<p>○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□多発すると防除が困難になるため、予防防除に努める。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠 (○) 及び防除上注意すべき事項 (□)
抑制 キュウリ	灰色かび病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
	褐斑病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。 □予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に持ち出し処分する。
	アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
夏秋 キュウリ	べと病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多くなるため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	斑点細菌病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多くなるため、予防散布に努める。 □病葉は早期に摘み取る。

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋 キュウリ	うどんこ病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	炭疽病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発病後の防除は効果が劣るため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □窒素肥料の多用は発生を助長するため、適正な肥培管理に努める。
	アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、葉液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
夏秋 ナス	褐色腐敗病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □ほ場の排水性を良好に保つ。 □長雨や台風後は発生しやすいため、降雨前または降雨後に薬剤散布を行う。 □降雨中に収穫した果実は乾いてから箱詰めする。
	うどんこ病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、予防防除に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏 秋 ナス	ハダニ類	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、予防防除に努める。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
	ハスモンヨトウ	—	やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナス調査ほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が高くないので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。
	オオタバコガ	—	やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場（甲府市、笛吹市）における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナスほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。 □老齢幼虫には薬剤の効果が高くないため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
キ ヤ ベ ツ ・ ア ブ ラ ナ 科 野 菜	黒腐病	—	平年並 ～ やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多いため、防除を徹底する。 □予防散布を徹底する。 □発病株は早期に除去する。
	菌核病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □台風、大雨の後に発生が多いため、防除を徹底する。 □予防散布を徹底する。 □収穫後の残さは丁寧に片づけ、焼却処分する。 □アブラナ科野菜の連作を避ける。 □耐病性品種を用いる。

※ハスモンヨトウ、オオタバコガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
キャベツ・アブラナ科野菜	コナガ	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、巡回ほ場（鳴沢村）における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、キャベツほ場（鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並からやや少ない。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
	アブラムシ類	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、巡回ほ場（鳴沢村）における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
イチゴ	炭疽病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 □苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗中は予防散布を徹底する。 □発病株は感染源になり、降雨や灌水により急速に蔓延するため、発病が確認された株は直ちに抜き取って適切に処分する。 □窒素肥料の多用は発生を助長するため、適正な肥培管理に努める。
	うどんこ病	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 □早期発見に努め、発病した茎葉は除去して施設外に持ち出し、処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。
	ハダニ類	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○9月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 □本ぼで多発すると防除が困難になるため、定植前までに防除を徹底し、本ぼへの持ち込みを防ぐ。また、定植後は発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けローテーション散布を行う。

※コナガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
ハダニ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
オオタバコガ	—	平年並 ～ やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市、鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
アザミウマ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □施設では施設開口部に防虫ネットを設置する。

※オオタバコガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

Ⅲ 各病害虫対策

【ブドウ】

[黒とう病](#)

- (1) 黒とう病の病原菌は結果母枝や巻きひげで越冬し、翌年の伝染源となる。翌年の発生を少なくするため、発病部位は切除し、ほ場の外に持ち出して適切に処分する。
- (2) つり棚の支線、簡易雨よけの資材やハウスのパイプに絡みついた枝や巻きひげを、丁寧に除去する。冬の剪定時には巻きひげ等が木質化して取りにくくなるため、柔らかいうちに除去する。
- (3) シヤインマスカットなど、本病に弱い欧州系の品種は特に重点的に観察し、罹病部の除去を徹底する。

ブドウトラカミキリ

- (1) 10月中旬までにモスピラン顆粒水溶剤2000倍を用いる。ただし、隣接園に収穫前の果樹がある場合は飛散しないよう注意し、古づるや新梢によくかかるように散布する。
- (2) 上記薬剤に代えて、10月下旬～11月上旬の晴天が続く日を選び、トラサイドA乳剤200倍を散布してもよい。ただし、隣接園に収穫前の果樹がある場合は飛散しないよう注意する。

【モモ・スモモ】

せん孔細菌病（モモ）、黒斑病（スモモ）

秋雨や台風による感染拡大を防ぐため、9月中旬～10月上旬の間に下表の薬剤を散布する。

作物名	散布薬剤
モモ	ICボルドー412（30倍）または4-12式ボルドー液を、2週間間隔で2回散布する。甚大な被害がでた地域は、2週間間隔で3回必ず散布する。 細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。なお、住宅隣接園ではムッシュボルドーDF（500倍）加用クレフノン（100倍）を用いる。ただし、薬害が発生する恐れがあるため、高温時の散布は避ける。
スモモ	ICボルドー412（30倍）を散布する。細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。

【モモ・スモモ・オウトウ】

コスカシバ

発生が多い園では、10月～11月中旬にトラサイドA乳剤200倍を散布する。ただし、隣接園に収穫前の果実がある場合は飛散しないよう注意する。

【夏作物収穫後対策】

ナス青枯病・半身萎凋病、トマト半身萎凋病・青枯病、キュウリつる割病、キャベツ黒腐病・根こぶ病、ネコブセンチュウ等

- (1) ナス、トマト、キュウリ、キャベツ等夏作物収穫後の根、株、茎、葉等は翌年の伝染源になるため、早めに抜き取り、ほ場から持ち出し適切に処分する。
- (2) 前年発生の見られたほ場では作付けをしない。
- (3) 輪作を行う。

【抑制キュウリの褐斑病対策について】

カンタスドライフロアブル、バルコートフロアブルは一部に耐性菌が確認され、今後の耐性発達が懸念されるため、連用を避ける。

【キャベツのコナガ対策について】

鳴沢地域において、フェニックス顆粒水和剤、プレバソフフロアブル5、マッチ乳剤、ハチハチ乳剤、パダンSG水溶剤に対する感受性の低下したコナガが認められたため、異なる系統のローテーション散布を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf

【表】

種子伝染性病害

種子伝染性病害には、裸黒穂病、なまぐさ黒穂病、斑葉病などがあり、これらの病害は春先以降に発生する。

(1) 温湯浸漬または冷水温湯浸漬する（県病害虫防除基準参照）。

(2) 薬剤による消毒は以下のいずれかの方法で行う。薬剤によって適用病害が異なるので、使用する前に登録内容を確認する。

- ・ホーマイ水和剤、トリフミン水和剤のいずれかを種子重量の0.5%粉衣する。または、ベンレートT水和剤20を乾燥種子重量の0.5%粉衣する。
- ・ホーマイ水和剤の200倍液またはベンレートT水和剤20の200倍液に6～24時間浸漬する。

立枯病

(1) イネ科以外の作物と輪作し、連作を避ける。

(2) 土壌pHが高いと多発するため、硫酸など生理的酸性肥料を用い、石灰質資材の施用を控える。

ハリガネムシ（コメツキムシ幼虫）

(1) ハリガネムシの好まない作物（ソバ、ナタネ、豆類など）との輪作か、被害の少ないオオムギの栽培を行う。

(2) 春先に生育の遅れているムギは被害を受けやすいので、発生が予想される地帯では秋の遅播きや春播きを避ける。

IV その他

【農薬の保管管理と適正使用について】

- 1 農薬の適正使用や、計画的な購入のため、農薬保管庫の整理を行きましょう。
- 2 有効期限切れなど使わなくなった農薬は放置せず、処理業者に依頼して適正に処分しましょう。
- 3 農薬を購入・使用する際には、農薬登録番号や使用基準などの登録内容を必ず確認しましょう。
- 4 農薬による事故を防ぐため、保管庫にはカギをかけておきましょう。
- 5 農薬の使用にあたっては、使用方法をよく確認して正しく使いましょう

連絡先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>

※参照 https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gj/kenkyu/nouyaku_shiyou.html